



浜松医科大学小児科学雑誌 6巻1号 編集後記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学小児科学雑誌編集部 公開日: 2026-03-13 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000724

編集後記

「浜松医科大学小児科学雑誌」2026年 第6巻 第1号を発刊いたしました。本号では、依頼総説1編、原著3編、症例報告3編を掲載しております。それぞれが小児科学分野における重要な知見を提供する内容です。ぜひご一読ください。また、論文の査読にご協力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

近年、医学論文の作成に生成AIを利用する研究者が増えていると聞きます。私も折に触れて生成AIを利用しているうちに、生成AIが作成する文章の特徴が何となく分かってきました。そして文章を見ると、「これ、生成AIっぽい？」と思うことが多くなりました。

文章構成の補助や英語表現の改善にAIが威力を発揮することは確かです。論文執筆においても、研究背景の整理や原稿の下書きなど、執筆の初期段階において時間的負担を軽減する利点はあるようです。また、非ネイティブの日本人が英語論文を書く際、語彙や文法だけでなく、英語らしい表現や論理展開を提示してくれる場面も少なくないように思われます。

しかし、生成AIの利用には限界と注意点があります。最も重要なのは、AIが誤った事実や存在しない文献をそれらしく提示してしまう可能性があることです。医学論文では引用の正確性やデータの信頼性が肝となるため、著者自身が文献の原典に当たって内容をしっかりと確認しなければなりません。また、AIによる文章は一見整ってはいるものの、専門的な臨床的洞察や研究デザインの意図といった“人間の経験に基づく深み”が欠けることも多いように見受けられます。出版倫理の観点からもAIは著者とはみなされず、AIを利用した場合はその範囲を明示することが国際的な潮流となっています。研究データや患者情報を安易にAIに入力することも厳に慎むべきです。AIはあくまで補助的な道具であり、論文の科学的妥当性と執筆責任は最終的に著者が負うという原則は揺らぎません。生成AIの進歩は医学研究と論文執筆の在り方に新たな選択肢をもたらしましたが、その利便性に安易に頼るのではなく、適切な距離感と透明性を保ちながら学術の信頼性を守っていく姿勢が求められています。

浜松医科大学小児科学雑誌編集部
飯嶋 重雄

浜松医科大学小児科学雑誌編集部
編集委員：宮入 烈、福田 冬季子、坂口 公祥、大石 彰、飯嶋 重雄（編集委員長）

浜松医科大学小児科学雑誌 2026年 第6巻 第1号
2026年 3月 15日 発行
発行者：浜松医科大学小児科学雑誌編集部（発行責任者：宮入 烈）

浜松医科大学小児科学雑誌編集部
〒431-3192 静岡県浜松市中央区半田山 1-20-1
浜松医科大学小児科学教室
メールアドレス：Ped_Journal@hama-med.ac.jp

表紙デザイン：漆畑 伶